

## 平成29年度 第1回（震災後77回）

### 陸前高田市保健医療福祉未来図会議 議事録

テーマ：「未来図会議はなんのために」

日時：平成29年5月12日(金)13:30～15:30

場所：陸前高田市コミュニティホール1階集会室

参加：38名 12団体

資料：下記にアップ

<http://healthpromotion.a.la9.jp/saigai/rikuzentakata.html>

#### 1 導入説明

陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 佐々木亮平氏

今年度1年間の未来図会議は、「はまってかだつてではじまるノーマライゼーションという言葉のいらぬまちづくり」ということで進めていく。

#### 2 内容

- (1) これからの未来図会議、そして陸前高田市の健康づくり、地域づくりに向けて  
陸前高田市民生部長兼保健課長 菅野利尚
- (2) 未来図会議が目指してきたこと ～一人一人が元気になる地域づくりに向けて～  
陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 岩室紳也氏
- (3) 未来図会議参加者による意見発表
- (4) その他連絡・アナウンス

#### (1) これからの未来図会議、そして陸前高田市の健康づくり、地域づくりに向けて

(陸前高田市民生部長兼保健課長 菅野利尚)

未来図会議が始まって以降、状況はいろいろ変わってきた。仮設住宅はまだあるが、高台移転や災害公営住宅建設とかなり進んでいる。未来図会議の価値は理解しているが、来図会議を含めたコミュニティ支援事業を国の交付金に申請したが、現在財源が確保できていない。財源が確保できない状況で事業を行うことはできないので、この価値とこれから引き継ぐべきことについて考えるべきである。被災地として住民の生活課題に向き合わなければいけないが、今出来ることは、介護、健康、地域で市が、住民、NPOも含めて、お互いに手を携えて地域課題解決に向かうことが、相当の価値と効果があるという再確認になった。私たちはこの間、未来図会議を通じてヘルスプロモーションに基づく環境を全体的に整備し、地域資源、ネットワークづくりを基盤にしながら、みんなが住みやすいま

ちをつくっていくことが今後の課題であることを学習した。それを総括的に表しているのが、「ノーマライゼーションという言葉のいらぬまち」である。具体的には、「はまってけらいん、かだつてけらいん」ということが本当に市民の間に大きく広がっていくことが、今後、市の健康づくりや介護予防や地域づくりを進める大きな基になっていく。

当市は、客観的に見ても産業が豊かなわけでもない。医療、介護、健康づくり、地域づくりを進め、住む方、訪れる方が、居やすく、住むにふさわしい場所だと思えるような魅力のある市をつくるのが、小さな陸前高田市が生き残っていく術だと思っている。

#### **陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 岩室紳也氏：**

陸前高田市の女性の平均寿命は今や岩手県でナンバーワンになっている。全国で東日本大震災を機に若者の自殺者数が減ってきているのは震災の影響で、高齢者の自殺者数が減ったのは、介護保険の導入による。国は、健康日本 21 の第 2 次を東日本大震災後の平成 24 年に打ち出しているが、その中で地域のつながり強化を訴えている。つながりと言えば、「絆」だが、もう一つの読み方は「絆（ほだし）」、「手、足、束縛、迷惑」である。この 2 つが相反するからお互い様ということになる。

地域のつながりができているところでは、信頼、ネットワーク、お互い様という関係性を築くことが出来、そこでは人は健康行動をとり、自殺も減り、総死亡率も減る。それだけでなく、まちづくりにもつながる。

どこでどのようにつながるかにはわからないが、つなぎ・つながり続けることが大切である。このような仕掛けに賛同し加わってくれたのが SAVE TAKATA で、「はまかだスポット」の発掘に取り組んでいただいている。

これからも皆さんと一緒に考え続けたい。

#### **陸前高田市 民生部長 菅野利尚：**

私自身、すべての会議に出席したわけではないが未来図会議から伝わってくるものを受け取っていたと思う。震災からの復興そのものがそうであったように、私たちにとっては日々の生活そのものが戦いであり、実践だ。東日本大震災が、人類史上稀にみる自然災害ということで、与えた影響、そしてどのように立ち上がっていくか、本当に大きな課題と教訓を含んでいるのだろうと思う。私たちは日々追われる中で、今を受け止めて、それからどう立ち上がり変えていくか、引き続き、みんなで一緒に行っていけば良い。岩室先生の話聞いて、それが間違っていることではないと実感できており、いつもありがたいと思っている。

#### **陸前高田市保健課 保健師 遠藤 綾子：**

先日、広田地区で保健推進委員からの希望が発端で健康教室を開催した。当市の保健推進員は改選期があるが年々顔ぶれが変わってしまい、年々活動を継続していくことが難し

い地域であった。新旧メンバーの顔合わせを兼ねてつながりを持ち、もともと活動していた食生活改善推進委員との協働開催を提案した。

**陸前高田市保健課 主任栄養士 佐藤絵里：**

広田地区には、食生活改善推進員がいるが、なかなか自主的に活動することが出来ていなかったが、何か自主的に活動したいという思いは強かった。地域とのつながりが強く、まとまりがあったことが健康教室の合同開催につながった。

**陸前高田市保健課 保健師 遠藤 綾子：**

保健推進員の会議と食生活改善推進員の研修会が続けてあった。岩室先生の話聞き食生活改善推進員の広田地区代表者よりぜひ保健推進員と話したいと申し入れがあり、食生活改善推進員と保健推進員が話し合える場を設け、今回の健康教室合同開催が実現した。

**陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 佐々木亮平氏：**

年度末に、保健推進員の活動を振り返る機会があった。未来図会議で話しているような内容をメンバーで振り返った。町の中で、何ができるのかについて話し合った機会があったから、今回の健康教室合同開催につながった。

**陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 岩室紳也氏：**

岩室が話したから皆さんが動いたわけではなく、仕掛けられた中で遠藤保健師が上手く調整して健康教室合同開催を実現させている。

**釜石保健所長兼大船渡保健所長 平賀瑞雄氏：**

今年度より釜石保健所長兼大船渡保健所長をしている。前任地は島根県松江保健所だった。島根では町内会自治会があり、健康推進員もいる中で、住民主体で健康づくりが位置づけられ、地区の中に健康づくりの会がある。年に1回総会があり、各地区の1年間の活動報告を行い、成果と、次年度の活動予定を周知する。自分たちのできることを皆で考え、自主的に行っている。

そこに至るまでの仕掛けを作ったのは、実は行政である。健康診断の結果を地域に返ししながら、住民に話題を作りながら進めてきた経緯がある。住民一人一人が自分の頭で考え行動することが出来ていた地域であった。高齢化が急激に進み、職場環境も変わってきている。若い時は活発に活動していた方が加齢とともに引退していくため、後継者づくりが難しいが、皆で出来ることを皆で考え、決めて行う仕組みは現在も続いている。

10年ほど前、ある町の健康推進員の総会に参加した。会長の魚屋の奥さんが挨拶で、「経済格差はあっても、健康格差はあってはならない」と話し、地域の活力のようなものを感じた。今日、この会議に出席して、皆さんが話す様子をみて感心した。震災という共

通の体験をされた方が自分たちでどうしていくかということを実際に考え、お互いに意見を出し合える場であり、聞いてもらえる場になっていると感じた。皆が抱えている問題を出し、考えていく場で議論し、市や県などの行政に必要なことを提言していく場となり、素晴らしいと感じた。自分たちで作りに上げていく活動という意味では、素晴らしい。ぜひ、未来図会議を継続して、必要に応じて行政への要望を出すことも含めて、行政との関係を構築する上で大切である。

**陸前高田市 民生部長 菅野利尚：**

肌身で感じている参加者の皆さんの抱えている未来図会議の価値が理解できたように思う。先ほど平賀保健所長も述べていたが、現在行政が行っていることを市民向けにアピールする場が年 1 回でもほしいと思う。そのような機会を設けることで市民の支持拡大、参加意識向上につながるのではないかと。未来図会議で情報共有が出来て良かったと思っただけのことではもちろん良いことである。このような場、機会が拡大すれば良いと考えている。

**4 その他連絡・アナウンス**

**一般社団法人 SAVE TAKATA 佐藤睦志氏：**

昨年の 9 月ごろから未来図会議に参加させていただいている。以前は、課題解決を目的としたまちづくり NPO 団体として活動していた。自分たちで声を掛け合ってソーシャルキャピタルを造成していくことが大切だと感じるとともに、力を入れて取り組まなければならないと感じている。今年 3 月に「はまかだスポット」ガイド展示会を行った際、来場者に「はまかだ」を知っているか尋ねると知らないとの声が聞かれた。また、「はまかだ」ののぼりについて知っているか尋ねたところ、「知っている」「見たことがある」との声が聞かれた。のぼりの意味の理解が深まれば、さらに拡大することが出来るのではないかと。そこで、「はまかだ」の意味の周知を図るため、パンフレット作成を企画している。まだ編集段階ではあるが、構成としては、初めに玉山金山の黄金伝説を掲載した。炭焼きの男性がおり、宮古のほうから妻をもらうが金の価値を教えてもらい、幸せに暮らしたという内容である。市民の皆さんは、「はまかだ」の価値を感じていないが、金山の金と同じような価値があることを説明するために取り上げた。また、ソーシャルキャピタル (+)、ポピュレーションアプローチを含めた内容を掲載している。この場には、専門に活動されている方もいるので、ぜひ皆さんの目で監修し、何かあれば、私までご連絡をお願いしたい。もう一つ付け加える予定としているのが、「はまかだ」から「ノーマライゼーションの言葉のいらぬまち」へという意味である。SAVE TAKATA でデザイナーの協力を得ながら作成し、配布したいと考えている。

**りくカフェ 及川恵里子氏：**

- ・りくカフェの春号の紹介
- ・りくカフェの飲食部門に野菜を提供してくださっている女性の記事の紹介

**社会福祉協議会 安田留美氏：**

- ・盲聾(ろう)者体験会の紹介 (コミュニケーション方法を含む)
- ・宮城県看護協会が主催する看護の日イベントの紹介

**一般社団法人 SAVE TAKATA 山本健太氏：**

- ・Brooming TAKATA が主催する、わくわく健康づくりセミナーの紹介

**陸前高田市保健課 保健師 佐藤沙希：**

- ・岩手県看護協会主催の看護の日イベントの紹介

**NPO法人 福祉フォーラム・東北 朝日のあたる家 長友智郷氏：**

- ・名誉館長 長澤茂氏の講演会の紹介

**陸前高田市被災地絆づくりアドバイザー 岩室伸也氏：**

「はまかだ」は間違いなくソーシャルキャピタルを醸成する手段の一つであり、どのようにして場をつくるのかを考えていく必要がある。「はまかだ」をすることによって自殺は減る。はまかだスポットのパンフレットを作成していただき、もっと周知拡大できるようにしていきたい。りくカフェではまかだを実践することで食生活改善だけではなく、自殺予防や健康づくりにつながる。

社会福祉協議会の安田氏が述べていたように、「ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくり」を実現するためには、意識しなくてもいい、年齢を重ねたり目が見えなくても、その状況を意識することがないまちにすることではないだろうか。ノーマライゼーションの言葉が必要なまちというのは、障がいがあることを意識しながら、意識させられながら暮らさざるを得ないストレスの多いまちである。ストレスが多いと、どうなるか。今年の AIDS 文化フォーラム in 陸前高田の打ち合わせで、LGBT（レズ、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）と言われる方々はストレスを感じて、結果的につらくて薬物に依存して同じ注射器・針を使用した回し打ちによって HIV に感染し患者となるという悪循環を辿ってしまうが続いている。このような状況から立ち直っている方は、友人を作り「はまかだ」を通して自身の周りに差別のない環境をつくることで薬物から脱している。自分が失敗したことを言える環境をどのようにしてつくっていくか、これからも一緒に考え続けたいと思う。

◇次回（第78回）：平成29年6月23日（金）13：30～15：30

メインテーマ（案）：はまかだスポットガイドと居場所づくりについて①

会場：陸前高田市役所 4号棟3階第6会議室